

『妖精の女王』と『失樂園』における宴

笹川 渉

1. 『失樂園』における宴—内乱期以前から王政復古の記憶

本シンポジウムの梗概にある通り、『失樂園』(1667)を意識して『妖精の女王』(1590, 1596)を読み、また『妖精の女王』を意識して『失樂園』を読むとき、宴の描写を通じて、ミルトンとスペンサーが生きた同時代への宗教上の懸念を表明していることがわかる。それでは、2人の詩人は、ホメロス以来、叙事詩の伝統的な場面である宴をどのように描き出しているのだろうか。

ミルトンは、『失樂園』第9巻冒頭で、英雄詩に相応しくないものの一つとして騎士道物語的な宴を述べているが(9.37)、宴を描かないという選択肢は選んでいない。具体的には、騎士道物語的な宴ではなく、神の国の宴が提示され、「天使たちはその日、ほかの祝祭日と同じように、聖なる山の周囲を、歌い踊りすごした」(5.618-19)と述べられる。これは、文学的に騎士道ロマンスとは一線を画すキリスト教叙事詩を執筆することを表明するのに加え、ミルトンは自身が生きた時代を反映させながら、政治と宗教への批判をおこなっている。

批判の一点目は祝祭日への批判である。天上の宴におけるキリストのお披露目を、「ほかの祝祭日と同じように」と表現している。祝祭日について言及する理由は、内乱期以前のイングランドにおいて、ピューリタンと対立した王党派たちは、祝祭日、特にクリスマスと言祝いだことにある。だが、クロムウェル政権のもと、もっとも取り締まりが厳格であった祝祭日もクリスマスであった。なぜなら、キリストは、国王と同一視され、キリスト生誕の祝いは、チャールズ1世/チャールズ2世を言祝ぐことと重ねられていたからだ。ミルトンは、イエス降臨の宴は、天上でしか開催されえないことを示唆し、世俗の宮廷を反転させた像を天上に描いている。

二点目の批判はイングランド国教会での聖餐式への批判である。天上の宴では、「楽しい交わり(communion sweet)」(5.637)として節制に基づいた天使と神の交流が描かれている。ここでミルトンが天上の宴を‘communion’と呼ぶ理由は、共和制以前(かつ王政復古以降)のイングランド国教会でおこなわれた、聖職者の力が特権的な力を持つようになったウィリアム・ロード体制のもとでおこなわれた聖餐式への批判となっている。つまり、本来あるべき祝祭日と communion の両者が、現実世界には不在であることを示している。

2. 『妖精の女王』における宴—アイルランドと宗教的他者

『失樂園』における聖餐式への批判は、墮落前にアダムとイヴがラファエルと囲むテーブルと、墮落後にアダムが建てようとする祭壇が「緑の芝」(5.391, 11.324)で作られているという類似性にもみられるが、『妖精の女王』第6巻でも、『失樂園』と同じ「緑の芝」(6.8.38)で作られる祭壇が登場する。この祭壇は、‘salvage nation’と呼ばれる食人族の一団が、セリーナを捕らえ、生贄を捧げるためのものであるが、ここには新大陸の言説とともに、アイルランドのカトリック教会でおこなわれる聖体拝領への批判が見られるとされてきた。聖餐式と食人の関係には、どちらも他者への恐怖があることが指摘されており、ローマ教会から独立することで確立されたイングランド国教会のアイデンティティは、秘跡の違いや、儀礼における差異化、たとえば聖餐式における実体変化の否定によっているが、その差異が失われるという宗教上の懸念は、イングランドの役人としてアイルランドで生活していたスペンサーが切実に感じた事実であろう。

他者への同一化への恐怖と食人の関係は、『妖精の女王』第1巻の赤十字の騎士にも見ることができる。擬人化された「絶望」(Despayre)は、主人公である赤十字の騎士に対して、旅の正当性を非難し、騎士としての誇りと力を失わせ、自殺をすることを勧める。赤十字の騎士は、ユーナが助けを求めたアーサー王によって助け出され、『神聖の館』(House of Holiness)でガレノス的な医学に基づいた治療を受けるが、その厳しい浄めの過程で苦悶の叫びをあげる赤十字の騎士は、自らの肉体をあたかも食べるかのような行為(‘rend’, ‘eat’)をおこなう。自らを浄化するための自己の肉体への暴力的な行為は、罪の世界から聖なる世界へと越境をはかる清めであると同時に、「絶望」の力によって自己の中に入り込んでしまった他者を排除しようとするものである。赤十字の騎士がイングランド自身を表しているのであれば、イングランド自身が抱えた病を治療する必要があることを語っていると考えられよう。

ローマ教会の教義を病とする捉え方は、初期近代の文献を紐解くことで明らかになる。ビディフォード(Bydeford)の牧師であるウィリアム・エストは、ローマ教会による影響を、人体を蝕む病として激しく攻撃し、イングランド国教会の聖職者トマス・アダムズもまた、やはりローマ教会がもたらす病魔を語っている。

スペンサーはエリザベス女王が、「ベルギーの海岸まで支配の杖を伸ばす」(3.3.49. Cf. 5.10.6) ことを望み、ローマ教会の影響をイングランドが受けること、あるいはローマ教会がイングランドに隣接するアイルランドに勢力を維持することの脅威を感じていた。赤十字の騎士の身体が治療を必要とする状況に陥ることは、この脅威が身に迫っていることを表している。

赤十字の騎士が、「絶望」によって負った傷を癒すために過酷な治療を受けることになったのは、ながらく幽閉されていたことによる「飢え (famine)」(1.8.43) が原因であった。これはもちろん肉体的な飢えだけではなく、正しい教えから逸れたことによる精神的な飢えも意味している。「飢え」は神の教えとの断絶があることを比喩的に表している。例えば、「主なる神は言われる、『見よ、わたしが飢えをこの国に送る日が来る、それはパンの飢えではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことの飢えである...』」(Amos 8:11) と語られるように、神の教えを得られない状態こそが「飢え」なのである。

3. イングランドに蔓延る「飢え」

再び『失樂園』に目を向けてみよう。『失樂園』の場合、「飢え」は正しいキリスト教徒の敵対者の属性として描かれている。サタンの娘であり伴侶でもある「罪」は、『妖精の女王』第1巻で赤十字の騎士と戦った「エラー」(1.1.16-26) を題材にしていることが指摘されているように、スペンサーの意匠を受け継いだものである。サタンと「罪」の間に生まれた「死」は、人間が原罪を犯したのちに樂園へと至ると、そこに広がる世界の全ての生物が「死」の餌食となることを理解しながらも、「永遠の飢え」(10.597) ゆえに満ち足りることができないのである。『妖精の女王』第6巻で語られるように、カニバリズムがローマ教会の脅威を指すのであれば、「罪」と「死」の間に産まれた怪物たちが、母である「罪」を食するという関係は、イングランドに迫る宗教的な脅威の寓意である。ミルトンはスペンサーの寓意の真意を継承し、「罪」と「死」を描いたといえるだろう。チャールズ1世の治世になり、その脅威はイングランド国教会に確実に這い寄っていたのである。

アダムとイヴの原罪が自然に与えた影響もまた食人の宴として語られる。アトレウスがテュエステスの子どもたちを殺して、テュエステス自身に食べさせた時に、太陽が驚いて逆に進んだという場面が叙事詩的比喻として語られる。ここには、「罪」と「死」の間の共食いという行為を想起させ、『失樂園』においても、食人が宗教的墮落、ローマ教会の脅威と結びついていることを示す例となっている。『妖精の女王』で、食人の宴に置かれ、そして、スペンサーが体験したローマ教会の脅威を表した「緑の芝土で築かれた祭壇」は、内乱期以前のカトリック化したイングランド国教会を目の当たりにしたミルトンにとって、キリスト教の危機を伝える一つのエピソードとして現前していたと考えられる。

参考文献

- Adams, Thomas. *Mystical bedlam, or the world of mad-men*. London, 1615. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.hawking1.agulin.aoyama.ac.jp/hss/4000000000633410>.
- Corns, Thomas. 'Roman Catholicism, *De Doctrina Christiana* and the Paradise of Fools.' *Milton and Catholicism*, edited by Ronald Corthell and Thomas N. Corns, U of Notre Dame P, 2017, pp. 83-100.
- Est, William. *Sathans sowing season*. London, 1611. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.hawking1.agulin.aoyama.ac.jp/hss/4000000000542098>.
- Goldstein, David B. *Eating and Ethics in Shakespeare's England*. Cambridge UP, 2017.
- Kilgour, Maggie. *From Communion to Cannibalism*. Princeton UP, 1990.
- King, John N. *Milton and Religious Controversy: Satire and Polemic in Paradise Lost*. Cambridge UP, 2001.
- . 'Sacraments.' *The Spenser Encyclopedia*, general editor, A. C. Hamilton, U of Toronto P, 1990, pp. 623-24.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Edited by Alastair Fowler, 2nd ed., Pearson, 2007.
- Sherratt, Susan. 'Feasting in Homeric Epic.' *Hesperia*, vol. 73, no. 2, 2004, pp. 301-337.
- Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Edited by A. C. Hamilton et al., Pearson, 2007.
- Vaught, Jennifer C. *Carnival and Literature in Early Modern England*. Ashgate, 2012.